随想

高射砲学校の石井さんへ『学校だより』

――昭和一八・一九年 蒲江国民学校――

坂本義明

（会員　蒲江町蒲江浦）

一　はじめに

同級生の石井肇亮君が、ある日やって来て、「私の叔父である石井政雄は、蒲江国民学校の高等科を卒業して、同校の用務員をしていた。叔父は成績優秀で、毛利賞をいただいた。一緒に学校に行った、幼い日のなつかしい記憶もある」と言う。「戦死したんよ」と淡々と語っている石井君の悲しみが伝わって来た。

蒲江町戦没者顕彰録によると、昭和一九年一一月一五日戦死、行年一七歳、陸軍軍曹。昭和一八年一〇月、千葉陸軍高射砲学校に入校、翌一九年一一月、成績優秀で一年繰り上げ卒業となる。一九年一一月一四日、佐賀県伊万里港を出港、マニラに向って航行中、東シナ海において魚雷攻撃を受け、壮烈な戦死と記録されている。

「陸軍高射砲学校で訓練に励んでいる時、蒲江国民学校の教師たちから届いた『蒲江国民学校だより』を綴った叔父の遺品がある。自分は子どもがいないから、手元に置いていても仕様がない。君に提供するから、役立てることがあるなら使ってくれ」と、『蒲江国民学校だより』の綴りを託された。拝見すると、これは、戦時下の国民学校の様子がわかる、郷土の貴重な歴史資料であることがわかった。

戦争が終って五九年、戦中・戦後の激動の昭和の時代を生き抜いた世代は、少数者になった。戦後の体験や記憶さえない国民が、大多数を占めている。

あの戦争の悲劇は、決して忘却することなく、子孫に伝えていかなければならない。学校生活が軍国化され、悲惨であった当時の状況を、記録から明らかにする必要がある。

蒲江浦の民は古来、伝統を誇る漁業で生計を立て、平和な暮しがあった。あの太平洋戦争に多くの若者が出征し、散華した。墓地に林立する戦死者の墓標は痛ましい。

あの戦争は一体何であったのか・・・。戦争によって失われた人命は、決して還らない。

二　『学校だより』に見る戦時下の国民学校

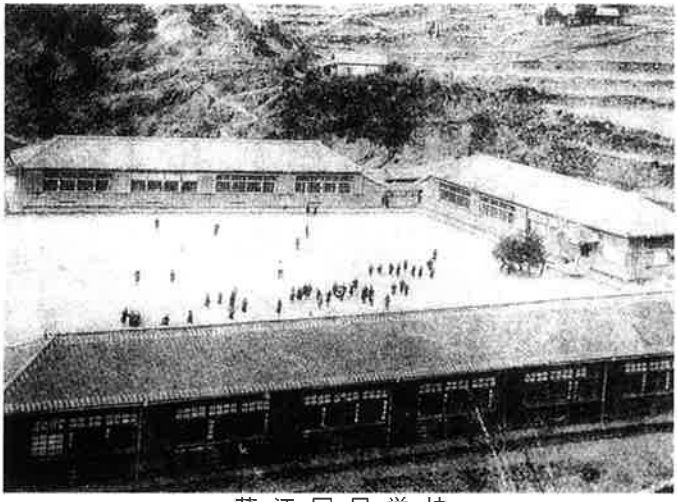
昭和一六年一二月八日、日本は真珠湾の米国太平洋艦隊を奇襲攻撃し、太平洋戦争に突入した。昭和一七年六月のミッドウェー海戦で敗北し、昭和一八年四月には、山本連合艦隊司令長官が戦死、同年一〇月には、学徒出陣の壮行会が行なわれた。敗北の兆しが見え始めたが、日本はひたすら決戦に突き進んだ。

こうした状況の中で、国民学校の様子はどうであったのか。蒲江国民学校の教師たちが、戦闘の訓練に励んでいる仲間に届けた『学校だより』を通して、その一面を見る。

(1)『蒲江国民学校だより』(昭和一八年)一部抜粋

○一一月五日　出征遺家族に勤労奉仕、イモのつる切、午前八時、五年生以上は校庭に集合して、各部落別に少年団結成、今日の敢闘を誓い校門を出る。ブーゲンビル島の戦果を思い、小さい僕等は武者ぶるい。

○一一月一〇日　家庭のイモ掘り作業、災害が僅少であった我が町は、豊作の予想に希望に満ちたイモ掘りでした。さあ、供出もできる。アルコールも充分できる。丹精こらして作った甲斐で、これか



蒲江国民学校

ら、お米の足しになる。
○一一月一四日　勤労報国隊結成、午前八時、役場前に国民学校、青年学校職員二三名、役場から助役他六名、高等科男子五〇名、巻脚絆姿で集合、高山の深田に向う。たまの日曜日も勤労報国、戦士思えば何のその、一日の溝掘りを終えて凱歌高らかに、鯉の獲物二五匹。
○一一月一八日　鰤二五〇〇本の大漁。観音山に、さっさと揚った旗二本。各家庭に配給され、夕べの食卓は生鮮な鰤肉に舌づつみ。この町の自慢だ。
○一一月一九日　麦蒔、早くも植付け、留守のご家庭の畑も耕されている。子どもが兄弟で耕している。けなげである。
○一一月二三日　新嘗祭、ブーゲンビル島沖の大戦果に対する学童の献金は、飛行機献金八六円九六銭、義勇軍後援会費三四円二八銭。
○一一月三〇日　河内橋・畔に、二反五畝を借り受け、高等科一年生・男子五〇名は麦を植える。蒔く者、けずる者、聖汗を流す。この日、高等科一年生・女子二〇名は魚の製造に奉仕。
今年は、暖かく小春日和が続きます。皆様の寒暑に屈せぬご苦労を思い、ご不自由を偲び偏えに良き皇国民の練成、後に続く忠子の育成に努力します。
昭和一八年、初冬の風強く身にしむ頃。

(2)『蒲江国民学校だより』(昭和一八・一九年)

○一二月一日　決戦下の物資を一つでも灰にしたら一大事。一年生から防火標語を各家庭に貼布。
○一二月七日　努力行軍、午後乾ききった河内道を、うねうねと歩調揃った白シャツの列は、高山・元の浜に向う、ようやく渚に着く。波と戯れる者、角力をとる者あり、三時には軍歌を歌いながら帰校。
○一二月八日　大詔奉戴式。大詔を拝して茲に八百の学童は新たなる感激に眉をあげ、こぶしを握り、ひたすら聖旨におこたえ申すの決意も堅し。
○一二月一五日　神社参拝。時局会、高学年部の四時限目、教頭は、鬼畜米英を罵倒し感動を与える。研究授業(算数)の研究会は、四時より日没まで。
○一月四日　女子青年学校生徒一六名は、勤労報国隊

を結成し、福岡某ゴム会社へ聖汗奉仕のため、豊洋丸にて出発せり。

○初等科三年の国語読本『三勇士』の課では、殊のほか感銘を深くしました。『もう死も生もありません でした。三人は一つの爆弾となって突進しました』先生、この所が一番いいなあ、と子ども達も兵隊さんの崇高なお気持ちに打たれました。

皆さんの後に続く子どもは、真剣に毎日を送っています。

三　子ども達の生活はこう変った

昭和一六年三月、『国民学校令』が勅令として公布され、明治以来の尋常小学校は、国民学校初等科に、高等小学校は、国民学校高等科に変更された。

国民学校は、大東亜を支配することが皇国日本の歴史的使命であるとし、将来の国家を荷負う子ども達を鍛えるための基本的練成に教育目標を置いた。

戦争が始まるや、子ども達は日本は神の国、聖戦の名の下に戦争協力、戦争への動員に向けられていくのである。

忠魂碑

昭和一八年以降の戦局の悪化に伴い、訓練ばかりが強調されて、学校は正に『訓練の場・勤労集団』になり、衣食が不自由になると、国民学校の児童・生徒たちは食料増産に挺身することになる。国民学校一年生も、ドングリ集めや、桑の皮むき（繊維資源）に携わった。少女たちは、あたかも自分の意志によってのごとく、つらい工場の仕事に志願した。

昭和一九年六月一六日、本土への空襲が始まった。登下校の際は、防空頭巾を着用する非常時姿が強いられた。爆弾投下の際は、親指で耳の穴をふさぎ、残りの指で目

頭を押さえ、地面に伏せる訓練をした記憶がある。実際にアメリカの艦載機の機銃掃射を受け、命拾いした仲間もいた。

学校は、危険ということで、神社が教室となったが、学習した記憶はない。学校教育の崩壊である。

「米英ソ支の四国を撃て」と叫んでいた、代用教員であった先生が辞任する時に、みんなが頂いたものは、無地の一枚の用紙であった。文字を書くにも用紙がなかったのである。

あの戦争は、軍部の台頭を許したことから、日本は中国の領土を武力占領し、戦争継続のために資源獲得の必要から、南方を侵略しようとして、太平洋戦争に突入した。

あの戦争は、アジア民族解放の戦であったと言い、日本の侵略性を否定する戦争観は、史実を歪曲するものである。戦争―残酷な傷あと。多くの人達が嗚咽した。

四　おわりに

石井さんのことを、もっと知りたい思いから、級友であったWさんに伺ってみますと、石井さんは成績優秀で、担任の先生に見込まれ、母校の用務員として残り、勉強を継続し、軍関係の学校の入学試験に備えていたということです。

なんと一七歳で出征し、生命を絶たれた不運を悼み、残酷な戦争を風化させてはならない。

地域の人々の戦争体験から、改めて戦争を見つめなおし、深刻な反省が必要である。

暮色が迫り、蝉しぐれの喧騒の中を墓域に向い、忠魂碑を訪れた。忠魂碑には戦死者の名前が刻まれている。石井さんの名前もそこにあった。

眼下の蒲江湾の目路の彼方に、黒い船が白い航跡を残しながら見えなくなった。東シナ海で散華した石井さんのご冥福を祈り、踵を返した。

〔参考文献〕

・千葉県歴史教育者協議会編
「学校が兵舎になったとき」
・家永三郎編「日本の歴史」
・竹内久夫著「あの戦争は一体何であったのか」
・蒲江町編「戦没者顕彰録」